
今日の村山

名前も知らない木なんです

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日の村山

【Nコード】

N5357Y

【作者名】

名前も知らない木なんです

【あらすじ】

彼の名は村山と言った。村山じゃなくて篤志あつしと言った。村山は名字だった。そんな村山篤志は今日も意気揚々と学校に出る。彼もまた、普通の人間として生涯を送るつもりなのだ。

まあなんというか始まります。

第一章 □ プロローグ（前書き）

ここから始まる村山篤志伝。

第一章 □ プロローグ

10時方向を指した短針が視界に入ってくる、おかしいな。そういえば今日は入学式だったつけ？　じゃあなおさらおかしいじゃないか。ははっ、10時ね。こいつはおかしいや。

あ、駄目だった。

「さあて、村山君。事情を話してもらおうか？　いや、別にその事情が情状酌量の余地があれば私としては全くかまわないよ」

寝坊し、11時頃に颯爽と登校した俺は生徒指導室に詰め込まれ、いま俺はこうして体育教官小沢清治郎せいじろうにいびられているのです。

「なんというか…こう、バーンってね。なっただんすよ分かります？」

俺は言い訳に支離滅裂なことを言っていた。

「篤志君がバーンってなっただ？　で？」

知らねえよ。

「ええつとですね。つまりは、様々な理由が絡み合ってしまったんです」

「どんな理由かね？」

小沢のとなり立っている黒人体育教師ジャン・リカルドがいやな笑みで聞いてくる。何も考えられないのでとりあえず言う。

「来る途中で車に轢かれてしまったり？」

うーむ、俺支離滅裂。

「よく無事でいたね」

そんな人間居たら怖いつて。

「で？　ホントの所は？」

しつこいなこの男。職務だから許してやるとするか。

「いや、まあ、その、意識が飛んでたんです。10時まで」

小沢はふうっ、とため息をつきながら背もたれに大きく寄りかかる。そしてジャンに耳打ちをする。何やってんのか知らんが、物騒

なことを話しているようだ。耳打ちに対してジャンは頷いた。

「この蘭高校は由緒ある名門校なのは分かっているだろう？」

「ええまあはい」

「そんな高校で寝坊なんていう事でこんな時間に登校しているような生徒が見られるとこちらも厄介だね」

「寝坊じゃないです」

「一応食い下がったのか。」

「じゃあ意識が飛んでいた理由は？」

「昨日の夜の話でした——あれは23時頃でしたでしょうか。私は布団に入っていました。そして目を閉じる。ここまでは良いでしょう。しかし、気がつけば周りは朝に、時間は翌日10時に。こんな事が信じられますか？」

「寝坊していたということかね」

「かなり遠い意味で言えばそうですが。私は国語的な表現からして

……」

「寝坊で良いんだね？」

「……はい」

俺はうなずくしかなかった。体育教師のにらみて怖い。

「……で、寝坊なんていう事でこんな時間に登校しているような生徒が見られるとこちらも厄介だね」

大事なことなので二度言われたがたしかに一理あるな。俺が校長なら休んでもらっていた方が良かったと考える。もう一つ、いつの間にかそう指示されたのか、ジャンはいつの間にか俺の後ろにいやがる。「私をどうするつもりなんです？」

怖いから聞いてみた。

「何、別に体罰というのは原則禁止だからね。ここで4000字詰め原稿用紙5枚分の反省文を書いてもらうだけだよ。じゃ」

小沢はジャンを残して部屋から出て行った。

「ああもう！　こんなの！」

俺は自らの失敗に腹を立てながらペンを走らせ始めるのであった。

背後に立つ黒人マツチヨに反抗するほど腕に自信は無い。

結局俺は反省文を頑張って書き、部屋を出たときにはすでに二時を回っていた。さらに昼飯を食っていないため、異常に腹が減っていた。

「いやな因縁ができちゃったなあ」

体育教師に覚えられるといろいろめんどくさいからなあ。仕方ないのもう新人生が居なくなつた校舎を見て回り、帰路につくことにした。

第二話 □ 初めての蘭高校（前書き）

昨日は寝坊のせいで体育教師に捕まっていやな思いをした村山。
しかし彼はめげずに今日も登校する。

第二話 □ 初めての蘭高校

翌日

俺の家族構成は父、村山 一成^{かずなり}。母、村山 柳子^{りゅうこ}。兄、村山 遼^{りょう}史^し。俺。妹、村山 三奈^{みな}。という感じで構成されている。難の変哲もなく、親が海外行ったりしてなく、女系と言ったわけでもない。腹正しいのは妹が異常に俺のことを嫌っていると言うことだ。ついでに兄のこと嫌っているが、兄も俺も温厚なので全てを優しく受け止めてあげている。さらに妹は何故か父のこと妹は嫌っているのだ。思春期の妹としては相応の反応だ。妹は我が家の男を全て見下しているとさえ感じる。しかし、逆に父は妹のことを溺愛しているので、妹の男関係とかの話になるとめっちゃめっちゃになる。妹に暴言を吐かれた時なんてそれはもう…。

そして朝ご飯。

「なんで昨日は起こしてくれなかったんだ？」

「あら、昨日なにかあったのかしら？」

俺と妹と父が座っている食卓。兄は寮生活なのでもう朝ご飯には顔を出さない。休日ぐらいいは来てくれると思うが。母は台所にいて、母に俺は昨日の事に対する問いを投げかける。

「あなた今日が入学式っていつてなかったかしら？」

莫迦な。俺がそんなことでミスをするとしても言うのか。試しにカレンダーを見る。

「ありや？」

一日だけ日にちをはき違えていたらしい。俺のバカヤロウ。

「バカアニキだから仕方の無い事よ。まったくこれだからうちの男は」

妹が実にやかましい暴言を吐く。しかしそれに反応したのは俺ではなかった。

「おいちよつと。それ私も含まれてないか？」

どうしてなぜか親父がうるたえる。お父さんはそこで会話に入るんだね。

「あら？ お父さん自覚無かった？」

妹自身も親父のことも含めての言動だったらしく、妹は親父に対し冷ややかに言い放ってしまった。親父は箸を持ったまま止まる。しかも豆腐を掴んだまま。あれ絹の方だろ。

「…」

箸が落ちる音が響き、親父の魂は彼方に消えてしまった。絹豆腐も味噌汁のなかに墜ちていった。全く…。

「こら三奈。お父さんはお前の事を溺愛しているんだからそんなことを言えばどうなるか。15歳になるんだから分らないはずもないでしょうに」

俺は忠告してやる。ホントこの妹は辛口過ぎるんだよな。ルックスが良いのが気に入らないが。

「うるさいわよバカアニキ」

「三奈、何でもかんでもかみつかないの！ お父さんだって頑張ってるのよ？」

三奈のことを母がしかる。心の底からざまあみる。晴れやかな気分で吸う味噌汁はまた格別だ。ヒヤッヒヤッヒヤ。

「はい」

返事を延ばすなよ全く。

「ごちそうさま」

気を失ってよだれを垂らしかかっている親父を傍目に俺は食器を手早くシンクに持って行く。妹は行儀良く食っている。

「今日はできるだけ早めに行くよ。母さん。昨日目を付けられたこともあるし」「分かったわ」

「バカだからしょうがないわよ」

やっぱ妹はかみついてくる生き物だった。

「三奈。お前学校では絶対猫かぶってるよな」

この性格なのに集まる女子は妙におしとやか。この前家に招き入れ

てきた女子もお嬢様のな雰囲気を出していた。こりゃあ黒だな。前から知っていたが。

「あんたは私の中学校と関係ないでしょ！」

「三年生なんだからもう少し慎みを…」

持って欲しいね。

「あんたは私の親じゃない！」

「そりゃ台所に立っているおばさんとそこで気を失ってる親父が親だ。当たり前だろ」

「ぐぬぬ…」

妹が歯がゆいに行った表情で睨んでくる。そんなに睨んでも何も出てこないからな。

俺はさっさと妹を無視しつつ自室に戻り、着替えて家を出る。

「行ってきます！」

「行つてらっしゃい」

母の爽やかな送り出しの言葉と、

「帰ってくるなバカアニキ！」

妹の不愉快な追い出しの言葉。てめえの音波には俺の鼓膜は反動できないぜ。とはいいつつもコミュニケーションをしてるだけ俺&兄と妹の関係は悪くないのかも知れない。不愉快だけど。

颯爽と玄関を開け、真っ先に駅へと向かう。蘭高校は何かと交通の便がよいのでありがたいこと限りなし。これが山の上だったらホント参ったことです。

さて、これから学校生活が始まるわけだが俺はまだクラスの奴と顔を合わせていないと言うね。とりあえず友達作って3年間を乗り切るといふささやかな願いを叶えよう。

第三話 □ デモンストレーション（前書き）

デモンストレーション

第三話 □ デモンストレーション

案外、クラスの目は厳しくない。昨日は慌ただしく、友達云々言っている暇もなかったらしい。俺にもついている余地ができたのは僥倖だ。

「と言うことで皆さん。昨日は慌ただしくてできなかった自己紹介です」

俺の状況説明をわざと遮るかの如くそう切り出したのはこのクラスを担当する女性教師。みなみやまえつこ 南山悦子という、男らしすぎる粹な美人。その顔のせいか、若さの割に妙に貫禄が出ている。資質、と言う奴やつなのだろうか。とまあ、先生に対する批評はここまでとする。

自己紹介と言えば先陣を切って1番目が指名されるに違いない。一応これでも何度も自分の自己紹介を反芻してきたのだ、最後のチエックと行くか。えーっと私は16歳の独身…。しかし俺の予想は余りにスウィートだったということがここで分かってしまった。

「では、昨日来なかった村山君」

クラスがざわめく。知らないんだけど、俺から？ ……なんでだよ！

口答えするぞ！ そう、いきなり俺が呼ばれてしまったのである。

「え、先生。私最後でも最初でもありません！」

この女、俺に何か恨みでもあるのだろうか。

「文句あんのか？」

江戸っ子がよこの女。いや…江戸っ子か？

「あります！」

とにかく生徒の主張は受け入れるべきだと思っんですよ。

「黙れ！」

ビクッ！ 俺の体は硬直する。生徒の主張は受け入れてもらえなかったよ…。しかもこの女は思ったより体育会系だった。目は大分つり上がってるし、反論したらどうなるか分かったもんじゃない。いや、分かっているのだがきつと認めたくないのだろう。頭が。

「お前は担任の私の言うことを聞けないのか!? ああん?」

いつの間にか鼻先18?の所まで顔が来ているという状況、超スピードとは恐ろしいの。ほんとマジ勘弁してください。あんた昨日ラーメン食ったでしょ、息で分かりますよ。絶対言わないけど。

「いや、その…まあですね。世間の常識では…」

「ここでは私がルールだが?」

何だよこいつ! 独裁政治かこいつ! 誰か助け船を…だめだ、みんな初対面だった。グヌウエ!

「いや、その…あれですか?」

「何が…あれなんだ?」

もつと近づけてくる先生。あんた女じゃないのかよ。他の男子の中にうらやましそうな目で見ている野郎どもが多少居る。代わってやるよ。できたらな。

「えつと…先生は私に何か恨みでもあるのでしょうか」

「無い」

余計分からん。新手のいじめか?

「じゃあなんでわざわざ私から始めようと?」

まさかもう先生の間ではある程度 of 話題になっているとか、まさかあの程度でな。

「お前の名前を職員室でちよくちよく耳に挟んでな、その時名簿でお前の名前を調べたんだよ。あ、こいつ来てない奴だと思ってな。

そしたらこのこ悪びれもなく今朝現れたってわけだ。これ以上理由が要るか?」

要りません、もうどうすんのよこれ。早速俺の名前が知れ渡っちまったじゃねえか。たかが寝坊でなんでこんな目に…。そんな思いを振り払うように俺は唇をかみしめ、拳を握りしめた。切り忘れていた爪が肌に刺さって痛くって反射的にパーになった。

「お? どうした? 目尻に涙が出てるぞ」

こいつは先生じゃない。鬼だ。もういいこれ以上粘ったって無駄に目立ってしまうだけだ。あ、手遅れだったわ。

「分かりましたよ！ やりやあいいでしょやりやあ！」

俺はそう言ってスタンダップ。Y A K E K U S O !

「よし、その意気だ。おゝいみんな。今から村山篤志が自己紹介するつてよ！」

俺は切つてやったさ。南山ババアにこの上ないメンチを。でもな？

世の中には見ちゃいけない顔つて言うのがあつてな？ とくにこの女の切れちまったときの顔なんだがその顔を見ちゃうと耐性のない奴は失禁しちまうほど恐ろしいらしい。

「…なにか文句でも？」

こわいよ！

「いえいえいえいえないですないですつて！」

「よろしい」

そう言つて先生は般若を止めて教卓前に戻つていった。

「クスッ」

クラスのどこかで笑い声が起きる。おいおい、笑い事じゃないぜ。本当だつてば。

「えー皆さん。静粛に」

俺はクラスが一定の静かになるまで手で制す。うむ、まあまあのコンディションじゃないの？ 俺は口を開いた。

「ええー、北西中学から来ました村山篤志です。…それと16歳で、カレーです。好きな食べ物が。それと頑張ってください」

これで終わりで良いですよね先生。チラッと見てみる。何か睨んでいるような気がしないでもないが、知らん！ 座る！

「チツ。えー…じゃあ一番から自己紹介頼む」

一番の生徒「ヒヤイ！？」

教師のくせに舌打ち！？ しかも結構ふにやふにやしてた1番目の男子が呼ばれた途端に直線になるとか…どれほどのプレッシャーを孕んでいるんだあの女…。

そんな感じで自己紹介は俺の左後ろの奴までいった。

「じゃあ次、宝条椿姫^{ほうじゅちんぎ}」

先生に呼ばれた瞬間男子の目は一気にそこに注がれる。いったい何が起こきようとしているんだ？ 宝条が椅子を引き、立つ音が聞こえる。いままで全く無関心に聞いてきた俺だったが他の男子の反応があまりにも顕著すぎたので、とりあえず後ろを向くことにした。

「宝条椿姫。天翔中学から来ました」

そこには美女？ 女神？ ビーナス？ のような、もう美という形容単語が付かないと失礼な気がしてくる女性が居た。これは確かに男子の反応も頷ける。しかしこれほどだと遠慮して告白すらされないって言うパターンであることが予想できる。

「宝条家の正当な跡継ぎとして、頑張りたいと思います」

ああ、やっぱり両家の出か。そう考えると、たしかに余り垢抜けていない気もする。ような気がした。

そのまま宝条は席に着き、頬突きながら窓の外を眺め始めた。うむ、絵になる構図だな。見とれちゃうな。

「いつまで宝条を眺めている。村山」

ああ、入学直後でもうミスった俺の高校生活。そう考えながらも脊髄反射により一瞬で前を向く俺。いやまて、ここで焦ればより俺の立場が危うくなるんじゃないか？ ここは自然体で行こう。さらに後ろから宝条の視線を感じる、痛い。つい首元を押さえる。そして視線の痛みは頭頂部に移動してしまった。

「じゃあ自己紹介は終わりだ。では…」

そのあと先生はある程度の話をして、教材を配ってHRを終わりにした。聞けばこのあとは何もやらないらしく、好きに部活を見ていけだそうだ。さて、周囲の誰かを誘うことにしよう。

第四話 □ 武藤武史少年（前書き）

村山はとりあえず前の人間に絡むことにした。
前の人間は武藤と言った。

第四話 □ 武藤武史少年

この蘭高校は平均学力がある程度高めな学校で、それ故両家の人間だとかと一般庶民が混同して存在するような高校だ。要するに、様々な人間が居ると言うことだな。

「さて…」

俺は周囲を見渡す。一部を除いて、ほとんどの生徒が一人で帰りの支度をしている途中だ。よし、ここは無難に前の男を捕まえよう。

「ヘイ」

俺は前の男の肩を叩きながら声をかける。すると、前の男は振り返ってきた。

「なんだね？」

この男、妙に偉そうな口ぶりである。特徴としては、少し老けた顔なのに妙に良い体格をしている感じだな。

「いや、このあと暇か？」

当然だが暇でなければ他を当たるつもりだ。

「拙者は剣道部に真っ先に寄るが…そのあとは暇だね」

剣道志望か…たしかに腕の筋肉が豊富な事が見て取れるほどにある。

「よし決めた。お前にくつついていく。名前なんだっけ？」

「さっき自己紹介で言った…武藤^{むとう}武史^{たけし}でござる」

「よし覚えた。じゃあ行ってみようか！」

「…一人の方が良かったのだが。まあよいか」

武藤はめんどくさそうだった俺はめんどくさくないので問題ない。剣道場というのは知っている人も居ると思うが、臭い。これはまあ仕方の無いことで、真夏にあんな装備であんなに動き回り、なおかつ洗わなければあんな臭いになるのは仕方の無いことだとは思っただが受け入れぬ。

「あそこにいる御仁を見てみよ」

武藤がある方向を指さす。それをたどっていくと、周りの部員が地

稽古してる中で、一人だけそれを見張るように立っている男が居た。なんか強そう。

「なにかこう…オーラってもんが出てますよね」

「知らない？」

武藤が信じられないような口ぶりで言うが、一般市民から見ればそんなもんなんですよ。

「すごいのか？」

「中学高校今まで県内の大会全てで優勝し、全国大会では必ず二位か一位を取るといって御仁でござる。今年でもう高校3年目で、名前は如月剣きさらぎけんと言う。しかしだがな…面白いことにあの人と必ず優勝争いをするもう一人の人は女性なのだ」

「剣道って男女混合だったっけ」

「いや、普通は男女で別れている。しかし、その女性は実力が高すぎて女子では敵無しだったそう。興味本位で特別に男子の大会に出してもらったらしいがそしたら優勝してしまったのだ。それから普通に参加するようになってしまったのだよ」

「へえ、すごいなそりゃあ」

「拙者はその女性を大会で遠くから一度だけ見たことがある」

「美人なのか？」

「美人であり、なおかつ凜としている。大和撫子をそのまま再現したような御方であった」

「なるほど…かなりの美人と見た」

少し時間が経ったら武藤が前を向いて目を輝かせる。

「如月殿が地稽古に混ざったでござるよ」

「どれどれ…」

俺は探してみる。分かるわけ無いじゃん面被ってんの。と思いつつ視線を軽く泳がせただけで何故かその人が分かってしまった。本当に全員面をかぶって顔が分からないのに何故かその人は分かってしまった。動きが一人だけ違うのだ。動きを見ると、ホントに実力があるってのは素人から見ても分かるというか…よく分かん。

とにかく相手の竹刀をよく見て、振り始めた瞬間に小手を打つ戦法が多い。しかもそれは前触れもなく動き出す行動、無拍子と言づらい。さらに振るスピードも速く、竹刀が見えなかった。勝てるかあんなの。

「さすがでござるな。あんな人間が二人も居るなんて驚きでござる」

「ああ、絶対正面から戦いたくないな」

「村山殿は闘争本能が刺激されたりとかしないのでござるか？」

「あればいいな。そういうの」

闘争本能よりも恐怖が先行しますって。あのスピードで振ればきつと紙如きなら一気にスパッといくだろう。ついでに俺の頭も。

「こりやまたドライでござるな」

「しょうがないじゃない、怖いんだし。ところでいつ戻るんだ？」

「今日はもうそろそろ剣道場を撤収するのだが」

「じゃあそのあと学校散策をしてから帰るか」

「…うむ」

そこで地稽古が終わり、剣道部は休憩し始めた。面を脱ぐと汗だらけ…これぞ男だな。

「村山殿、拙者は如月殿と少し言葉を交わしたいのだが…よろしいか？」

我慢ならんといった感じで武藤が頼んでくる。おそらく如月という人は高校剣道でもとんでもないレベルの人で、その人と話したいという気持ちはよく分かる。

「よし、行つてこい」

「かたじけない」

武藤は音を立てずにすり足で走っていった。もしかしたらあいつも剣道すごいんじゃないか？

第五話 □ 武藤武史少年と文芸部（前書き）

文芸部室前にてトラブル発生。

第五話 □ 武藤武史少年と文芸部

「いやゝ感激でござるよ」

とろろんとした顔で帰ってきた武藤。そこまでうれしいのか、お前。
「うれしそうだな」

「ただ話せただけじゃないのだよ。拙者めの力量如きを認めてくださっていたのでござる」

「そりゃあ、お前がすごいんじゃないのか？」

「いやいやまだ拙者。もののふとしてはまだまだ… 全く最初から成長してござらん」

目を閉じ、むうと言った顔でうなずきつつ話す武藤。そう言う奴に限って強いというのが世の常である。

「じゃあとりあえず見回るか」

俺は何もプラン無しで引き連れることにした。

と言うことでまず文化部の確認。こいつは入る気はさらさら無いだろうが、俺としては運動部に身を置くほど自分の身をタフだとも思っていない。ということ、文化部入ろうかなみたいな気分で文化部が密集する特別教棟にやってきた俺である。

「文ゲイ部？」

「文芸部でござるよ。村山殿」

「ああ、いや分かってたんだけどな」

文芸部という張り紙の張ったドア。部活動勧誘は剣道部を見ている間になりを潜めているので、現在は各部活動が自然に部活をやっている様子が見られる貴重な時間なのだ。

「どんなことやってると思う？」

俺は聞いてみる。

「やはり本を書いたりだとかそう言うことをやっているのでは？
文の芸術、そんな意味で文芸であるから」

「いややっぱりそうだな。乗り込む？」

「仮にも先輩方だ。失礼は無きよう」

ふ、文芸部がそこまで堅いはずがないではないか。

「よいいくか」

俺はまずノックをする。

「一年生ですが部活動見学をしてかまいませんか？」

そして確認を取る。面接の基本だ。

「ええ！？ ちょっと待ってください！」

なんだ？ 予想と違う返答だな。

「入っても良いですか？」

さらに聞いてみる。反応に期待しちゃうよね。

「ホントに待つてください！ 今は絶対開けないでください！」

そう言われると……もっと開けなくなっちゃうなあ……！！

「開けますよ？」

「ちょ！ 村山殿！ 無礼はないようにと言ったではござらぬか！」

「……ちえ」

ドアの向こう。文学少女である西曉寺静さいきょうじしずかは自らを小説の主人公に見立て、西曉寺家の余りある財産を使って衣装を作り、やっと部活動見学が終わったと言う所で安心し、そして衣装を着込んで一人劇を始めた途端にドアをノックされたのであった。

そしてドアの手前。

さて、開けるかな。

「村山殿。まだOKは出ておらぬよ」

ドアに手をかけた所で後ろからグサッ。

「いいじゃん」

「仮にも先輩であるのだぞ？」

武藤の声をスタイリッシュに無視してガチャッ。

…… ああん？

「ああん？」

つい声が出てしまった。声は心にとどめることはできないのだよ。

村山君。決してメンチを切ったときなどに出す声ではなく、いきなりの出来事に状況がよく分からなくなっているときの声だ。ああ

ん？

「……あ……」

目の前の女性も状況が分からないようで、パンツとブラジャーの姿で固まっている。さて、何をやっていたのでしょいか。

「村山殿…いい加減に…ん？」

ドアの影になつていて見えなかったようで、現時点で武藤は気づいたようで、口をあんぐり開けたまま固まっている。ここで俺の意識が最初に復活する。

「いやあすいませんね。顔洗って出直してきます」

そういつて笑顔のままドアを閉め、スタコラサッサ。美人だったが、その下着を見ることはできたが、いかんせん罪悪感にさいなまれてうれしくない。

「あああああ！」

その後、その人らしき人間の叫びが聞こえてきた。すいませんでした。

「あえ…？ 村山殿。拙者はどこへ行っていたのでござるか？」

俺がさつさと手を引いて一緒に退却してきた武藤はここで気がついた。しかし女性の着替えのシーンをつい見てしまつて固まるなんてシチュエーションは存在したのか。妹の場合は反応速度の問題で、こつちが視認する前にぶつ飛ばされる。

「h e a v e n (天国)」

「そうでござつたか…つてそれは拙者が死んでいたと言つことであるか！？」

「まあ良いんじゃないか？」

冗談が通じないなこの人！

「それは良くないことであるぞ！ 浄土に行くというのはもののふの一生を終えると言つこととござる！ 重大でござる！」

「あゝ！ もう嘘だよ嘘！ ただ意識がどっか行つてただけだよ」

「それならいいのだが…」

ウェーブが激しいなこの男は。

「で、これからどうする？ 俺はもう探索飽きたぞ？」

次の予定について聞いてみた。

「拙者は剣道を見られただけで満足でござる」

「じゃあこのくらいで良いか」

「解散でよろしいか？」

「そうしよう」

と言うことで、俺達はそこから解散し、帰路に着くのであった。

第六話 □ 兄と俺と妹（前書き）

自宅で自らの歴史を振り返る村山。

第六話 □ 兄と俺と妹

木曜日に行われていた入学式。残念ながら参加できなかったのだから先生に目を付けられる。

金曜日、オリエンテーションを兼ねたホームルームと教科書の配布。それと部活動見学で下着を見た。ついでに武藤という仲間ができた。

休日の昼下がり、入学式を終えた俺にちょっとした寂しさをためか、寂しくなったのか兄が帰ってきていた。ダイニングにて俺はミカンを食べながらテレビを見ていると、兄が話しかけてきた。

「はあ……」

自分の過去を振り返って（いままでの過去は無しとして高校からの話ね）ため息をついちゃう俺様。

「弟よ、何をため息をつく？」

それを見て問いを投げかけてくる兄。ちなみに兄はいつもこんな口ぶりだ。

「それはこれからの高校生活に対し、悪い予感しか感じ得られないため」

「そして、それを直すために篤志は何をする？」

「努力」

「勇気」

「勝利！！！！」

「うつせーよ！」

リビングにてのんびりテレビを見ていた妹が俺達に怒鳴ってくる。母はお前をそんな風に育てた覚えはないそうぞ。

「まあいいではないか妹よ。兄のめでたい入学式なんだぞ？ 中学校から兄が消えてさぞかしうれいだろう」

「こらあんだ。それは俺に対する文句かね？」

「……バカアニキが居なくなっって清々したわ！」

「そんなこと言うと勉強教えないぞ」

分らないことを一回鼻で笑ったら鼻を殴られたことがあったしな。これから独り立ちをする良い機会だ。

「それだけは止めて！」

妹はこの一言にだけは弱い。

「ッフ」

その反応に鼻で笑ったらいきなり妹が立ち上がり、一気に間合いを詰めてかかってきた。運動能力は一流なんだけどな。少しブレインがウィークなところがプロブレム。

「このクソ兄貴！！！」

バカアニキを昇進しました。そして、鉄拳が飛んでくる。オフウツ……。

「ハッハッハッハ。お前達はいつも仲が良いな」

兄がケラケラ笑っている。こっちは鼻が痛くて涙流してるんだけどな！

「なんでこいつと私が仲が良いのよ！」

妹が俺を指さしながら兄に怒鳴る。人を指さしちゃいけないって親に教わらなかったのか？ おい俺の親！

「いやだってね、世間では結構妹と兄との仲が希薄になってくる世帯が多い。しかしお前達は今でもそんなにコミュニケーションを交わしている。それは実に素晴らしいことだ」

「なんで素晴らしいのよ！ 大体こいつがいつもちょっかい出してくるからいけないのよ！ いけないのはこいつ！」

「そのころ妹は心で……（いつも寂しいのよ！ お兄ちゃんも最近はおまてしてくれなくなってきたし……）ゴフウツ！？」

いってえ！ 心の声らしき理想をやってみたがやっぱり殴られるよな。

「やっぱり仲が良いじゃん」

さらに腹を抱えながら笑う兄。

「……もういいもん！！！」

あらら、ドアを開けて出て行っちゃったよ。

「…アフターケアは？」

兄が問いを投げかけてくる。

「無し」

俺はきつぱりと答えてやった。

第七話 a f t e r 入部

入部の時

俺は昼休み、前の武藤と入る部活について話していた。しかし、武藤はすでに入る部活は決まってるらしい。見当が付く。

「お前は剣道部だよな」

「いかにも」

いかにもといった感じでいかにもと答える武藤。まあもともとこの男に同じ部活を期待しているわけではない。俺にだってその程度の自立心はある。

「さまざまな部活を見て回りました」

俺は切り出す。

「そして？」

「そして私は思ったんですよ」

「どこの部活にするか？」

「文芸部でいいと思いました」

俺がそう言った瞬間。武藤が俺の後ろの方に目を向ける。なにかあったのか？

「何かあったの？」

「いや、別に何も… まあ文化部の中では実績もある故、それは良い判断だと思われる」

まあいいか。

「他にも生物部や、化学部を見て回ったがどうにも趣味に合わない生徒の風が」

なかなかクラスの中でも卑屈な奴が集まったりするが、俺はそういった奴は嫌いだ。自己主張をしないやつはまず受け付けられない。「結構好き嫌いが激しい？」

「ああその通りだ」

「…まあ村山殿の好き嫌いはさておき、文芸部に決めた決定的な理由はある美人の人かね？」

「それもあるが、違う。」

「あとで話してみただけで結構気さくな人だった。下着姿を見たことに関しては一応謝つといたよ。お前に代わって」

「…ちよつと待つのだ！？ お主拙者がドアを進んで開けたと進言したのか！？」

「ちよつと悪かったかな…いや、過ぎたことを責めることは良くないことで、これに関しては保留だな一生。うん。」

「まあ、いいんじゃないかな？」

「良くない！！」

「気にするな。ところでだが」

「なんだ！」

「ははは、怒っちゃってえ。」

「俺が文芸部に入ることにしたのはもう一つ理由があつてだな。あの美人の人はなかなか良い家に住んでいるようで、近い人間に対しては先生の口が出しづらいらしい。したがってあそこに入れば俺のスクールライフはベターノーマルになるわけだ」

「先生に悪い意味の特別扱いを受けるのはごめんだからな。」

「なるほど」

「そう言うことだ」

「俺が理由を伝えるのと同時にこいつの怒りはすぐに鎮んでしまったらしい。思ったより簡単に鎮んでくれたが、少し拍子抜けだった。」

「で、今日入部届を出すということか？」

「昨日出したよ。なんかあの入部員が定数まで今まで行ってなくてしかも俺含めても足りないからもう一人欲しいとか何とか言ってたよ。お前は？」

「まだ入部届出してない故、兼部ならできるが…」

「顎に手を当てながら考える武藤。駄目だろ、お前は剣道頑張らなきゃ。」

「いやいや、お前は剣道に打ち込め。大丈夫だ、何とかするから」
ホントにそう思う。

「…村山殿はやはり拙者の見込んだ男よ」
腕を組みつつにやにやする武藤。気持ち悪いぞ。

「できるだけ定数には届かせるよう頑張るからな。じゃあこれから
五時限目始まるしこのあたりで話は終わり」

「御意」

さて、放課後どうするか考えなければ。

第八話 □ 文芸部 存続の危機！？（前書き）

しかしそこまで危機じゃなかった。

第八話 □ 文芸部 存続の危機！？

文芸部室、俺にとって最初の活動の日。

「さて、村山君」

西曉寺さんがまずホワイトボードに一筆、部員の定数と書き込む。

「この問題は我々にとって死活問題なのは分かりますね？」

「もちろんです、プロですから」

全くお笑いだ。

「そして、我々に残されたタイムリミットは…」

その時、ドアが外側からノックされる音がした！

「今の聞いた！？」

西曉寺先輩が聞いてくる。

「ええ、とりあえず私が開けてきます」

「頼んだわよ」

俺はおそるおそるドアへと向かう。そして、まず一言。

「目的を述べよ」

一拍おいてから返事が返ってきた。

「此の部活に入ることだ」

女性の声だな。

「よろしい」

レディーに手を煩わせることは私の騎士道に反する。

「どうぞ」

俺はドアを開ける。すると、予想外の人物がそこにいた。

「…こんにちは、宝条椿姫さん」

見とれるような、いや見とれてしまう。

「いつまでもそこにいると入れないのだが」

ずっと見つめていたからだろうか、顔をすこししかめながら退くように言われた。しかめっ面も似合うなんて…こりゃ絵画だ絵画。

「いや、すいませんね」

俺は大人しく退く。しかしなんだ、本当に文芸部に入りに来たのだろうか。…俺にとってはさらに手を出しづらくなってありがたきこと限りなしなのであるが。

「…あなたが入部希望なの？」

あれ？ 西暁寺部長がいきなり剣呑な雰囲気醸し出したぞ？

「いかにもそうだ。私はここに入部したい」

「なぜかしら？ ライバル財閥の末裔同士なのに同じ部活に入れてやるとでも思つて？」

あら、お知り合いかしら。

「ここは学校だ。そう言う分別ぐらいならつけられる御方だとは思つていたのだが」

「あら、昔からの因縁のほうが優先じゃなくて？」

喧嘩だなこれは。西暁寺先輩つて結構気性が荒いのだろうか。そうは見えなかったのだが、見た目に騙されたか。その前に速やかに止めないと。

「お二人さん。そのくらいで口論はおやめになさい！」

俺はそう怒鳴った。しかし二人は少し俺の方を見て、そのまますぐにまた向き合ってしまうのみであった。

「私は初めて自らの力で学校に来たのだ。したがって私は家柄などにとらわれず、ただ一人の女生徒として」

宝条はそのあと少し俺をチラ見して、

「学校生活を楽しみたいのだよ」

そう言い放った。しかし俺の存在感の薄さにはしのびも感嘆の声を漏らすんじゃないだろうか。

「…面白いわね、あなた。なんか変なむかつきも消えたし入部を許可するわ」

しかもなんか和解ムードになつてる感じだ。

「それとあと、あなた今恋をしているのかしら？」

西暁寺先輩は一回俺の方を見てから宝条に言葉を投げかける。

「いや、恋というか……うーむ。まあ、面白いやつだなとは思っている」

宝条は俺の方を見ながらそう言う。面白い奴だとお！？

「人数揃ったしさつさと活動に入りましょうよ！」

俺はさつさと話を中断させる。そして、大きな音を立てて椅子に座った。空気だったという過去を振り払うために。

第九話 文芸部として

机を挟み、宝条が俺の正面、西曉寺先輩が右側に座る。

「結局部員の定数までの件は伸ばせませんくたりでした」

早速メタ発言です。作者の思いを代弁しないでもらいたい。

「それはメタ発言だと思うのだが」

宝条が適確な突っ込みをした。

「あら、私としたことが失礼。オホホホホ」

乾いた笑い声だ。

「で、どうします?」

俺が口火を切る。そもそも俺が最初に切らなければきっと一生始まらない気がする。

「まずは、文化祭に向けての長編小説と…図書室に置く用の短編小説を作りましょう」

行動は力オスだが活動は普通だったわ。うーむ、何か物足りない。

「私は思うのだが、文芸部ならいつそ小説大賞に応募してはどうか」

宝条がなにげに素晴らしい案を出した。西曉寺部長は顎に手を当て考えている。

「私もそう思います」

俺も後押し。面白そうだし。

「合宿やろうかしら」

部長がいきなり…どうしてそういう答えになるんだ。

「いや、西曉寺先輩。文芸部で合宿って何やるんです」

「そりゃあ、枕投げとかねえ」

「駄目だ」

宝条がばつさり切り落とした。nice job.

「なによ、何でもかんでも頭ごなしに否定する! だから大人は嫌いなよ!」

「そうですか、他には何かありますか?」

喚きだした先輩の喚きをスルーして質問。

「なんで無視するのよ！ まあ良いんだけど！」
まあいいのかよ。

「…そうね、先代の人々が様々な文学賞を取っているのよ。さほど有名じゃないけどそれでもすごいこと。私たちもそれに習って文学大賞などに応募しよう」

「じゃあ各々小説を書き始めよう、という認識でも良いか？」
宝条が質問をする。

「そうね。じゃあノルマを決めましょう」
案外書くと小説というのは期限が伸びがちだ。しっかりとしたノルマを決めるというのは正しい。

「一ヶ月で」
「三週間」

宝条が先輩に続いて言う。短くねえか？ いやまてよ？ どのくらいの規模の小説を書くかにもよるな。

「どのくらいの規模になるんです？」

「そうね…それも各々に任せるわ」

「書き方のコツとして何かあるのか？」

宝条がすこし呆れている。西暁寺先輩結局あまりしつかり者じゃなかった。

「私はその時思ったとおりに書いてるわよ？」

計画性を持って書かなければ伏線すら張れんだろう。

「それでは後々駄目になりますって」

「計画性を持つのも良いけど、その時その時で考えることも大切な
のよ。篤志なら分かるでしょ」

たしかにそうだ。うむ。

「じゃあノルマ一ヶ月で良いでしょうか？」

宝条がしかめっ面になる。

「そんなに待てない」

「え、お前まさか三週間でも長いとか言うなよ」

「私は基本的に十万文字を三週間で仕上げる」

速い。美しい上に才能もあるってどれほど血に恵まれているんだ。

「じゃあ宝条は三週間で、私たちは一ヶ月でよろしい」

先輩がそうまとめた。何も変わってねえじゃん。

「それだと私が短くなっただけで何も変わっていない」

「宝条、日本は多数決だよ。全員一ヶ月と言うことでここは我々に
一歩譲ってくれるかな？」

宝条なら退いてくれるはずさ。

「…致し方ない」

「ありがとう！」

しかし俺には大きな障害があった。今回書く小説は俺の処女作になると言うことだ。基本的に稚拙な文章になる処女作。見せ合いっこかしたら笑われるかも知れないのだ。ありがとうなんて言うてる暇じゃなかった。

「今回はこれで解散」

西曉寺先輩が軽く頭を抱える俺とそれを無表情に見つめる宝条に対して言った。

第十話 宝条にメールしたばかりに（前書き）

宝条にメールしたばかりにめんどくさいことになった村山。

第十話 宝条にメールしたばかりに

「たっだいま」

「あら、おかえり」

家に帰ってから待っていたのは母の暖かい一言。妹は部屋にいるか部活だろう。

「今日の夕飯何？」

まず俺はこれを聞く。これを聞かなければ気になって何もかも手つかずになってしまうのではないか、というほどだ。やっぱりそれほどでも無い。

「豚汁にホッケの開きを焼いた物。そして白米よ」

魚料理か……近頃は肉料理中心の家庭が増えていると聞く。肉料理は飽和脂肪酸が含まれているので摂取するのは良いがあまりすぎると良くない。対して魚は摂取許容量が圧倒的に高い不飽和脂肪酸体にも良く、頭が良くなるという素晴らしい食材なのでみんなも食べよう。

「なるほど分かった。これで今日も勉強に集中できる」

「頑張つてね」

母の言葉を背に、俺は二階へと上がった。

自分の部屋は至って普通の男子生徒の部屋だ。特に散らかりもせず、アニメのポスターも貼っていない。張っているのはカレンダーのみで、モデルガン^{hm}249（¥69800）^ㇿを一丁飾っているのみである。

さて、自分の部屋に来て何をするかというと小説の構想を練らなければならぬ。実際俺が書くと戦記物が軍事物になりかねない。日常やファンタジーなどもつてのほかだ。

「……やはり戦記物が良いか。宝条はどんなだろうか」

さっき交換した宝条のメアド。にやりと口が笑うのはこれを持っている男子生徒はほぼ一人。俺だからだ。だからといってそれが得だ

と言えはたかが知れていることなので得とは言い難い。でもうれしい。

と言うことで俺は宝条にメールを送った。

↓『やあ宝条。そなたは小説において如何様な構想を練っているのであるか』

一分くらいで返信が来た。

↑『いま見合い中だからメールはすこし待ってくれるか』

ブホッ！ いきなりそれか！ ……しかたない。宝条の顔を立てると言うことでここはメールを我慢しよう。と、俺様が思うとも思つたのかね宝条ウウウツ！

↓『相手の男性はどんな人間であるか』

反応が楽しみだ。

↑『^{ふたひし}二菱社の社長の長男だ』

ゲエエ！ 超財閥野郎じゃねえか解体されるやオラア！ ……いかんつい熱くなつてしまった。しかし起伏のない文章だ。もっと焦っている感じで書いて良いのに。

↓『で、本心はどうしたい？』

ずばり核心を突く良い質問を出したつもりだ。さあ宝条！ どう返す！？

↑『早く小説の内容考えたりおやつ食べたい』

宝条らしからぬ文章だが……いやこれは宝条の本性だったり？ じつはしたいことがあるんだけど体裁つてものがあるから好き勝手にきないって感じ？

↓『そこに食べ物はあるか』

宝条も気になるがそこにある食べ物も気になった人も居るのではないのだろうか。

↑『キャビア。トリュフ。フォアグラ』

馬鹿なあ！ 三大珍味が一堂に会するだとお！？ なに仲良くしてんだこの三大珍味め！ お前らなんか喧嘩しちまえ！

↓『お持ち帰りはできますか？』

でも食べたいんですよ。だって普通手が届かないじゃん。

↑『できると思うか?』

↓『お前ならできる! 絶対だ!』

↑『そういうなら……ってやるか馬鹿!』

ほほう、乗り突っ込みですか。宝条の良さを一つ学んだぞ。良さがどうかはともかく。

レストラン ジ・ラムダトウ にて。

「さつきから宝条さんはたびたび下を見ていらっしやるのですが何か居たのでしょうか?」

二菱みつおはさつきから宝条がテーブルの下に腕を縮め、たびたび下を見ながらしきりに顔の表情を変えているのを見て心配になっていた。なにせ相手は見合い相手、自分の良さをアピールできないとこまるのだ。

「い、いや何でもありませんわオホホホ」

宝条はすかさず正面を向き、作り笑いをする。二人きりの見合いというのは実にやりづらい……宝条椿姫はそう思った。

「ふう、よかったです」

二菱みつおは易々と納得した。

「学校ではどんなことを? 一般市民の入る学校に入学したようなのですか何故なのですか?」

「一般の学校に入学しようと思ったのはもう少し世間を知ろうと思ったからですわ。蘭高校はあれでも一応私のような上位の人物も少なからず居られますので両親の反対も簡単に説得することができました」

二菱みつおには一般市民と共同で学ぶなど理解のしがたい行為だった。

「なるほど……」

だからそうとしか言えなかったのだった。

「個性的な人が多いので、学校では常に新しい発見がありますわ。

確かに私たちの生活も良いのですけど、一般庶民と共に過ごす生活も学ぶ所が多く、それはそれで楽しいのです」

宝条は思ったことを告げる。二菱みつおは一般市民を見下す典型的な貴族であったのでいよいよ理解できなくなった。だからだろうか、こんなことを言ってしまったのは。

「一般市民のような者とあなたは全く身分が違います。私が素晴らしい学校に入学できるよう優遇させて……」

「あなたには落胆させられました」

宝条はキャビア、トリュフ、フォアグラに全く手をつけてない状態で立ち上がる。

「どういうことですか」

二菱は現状理解すらできていない状態で問う。宝条は無表情に答えた。

「あなたはまだ世界を知らない。親を見習ってもう少し広い視野を持て」

最後には敬語すらなく。二菱はそのまま硬直してしまい、宝条はゆつくりと歩いて行き、レストランをあとにした。

リムジンに乗り込む前に宝条は自らの初老の執事、東郷功とうけいこう

「無駄足だった」

宝条からのメールが遅い……気になるがここは小説を考えて気長に……お？

↑『見合いは終わった。全く最近の財閥息子は世間のことも知らないのか』

文句言うなよ。あいつらだってあれで頑張ってるんじゃないのかなあ？

↓『ところでお前そんな早いつてことは三大珍味もう食ったのか？』

メールは一瞬で返ってきた。

↑『全部残した』

あとでぶっ殺すこのアマ。おっと……俺としたことが熱くなっちま

った。

↓『明日、いや今日覚悟しとけ。残された三大珍味の恨みを余り舐めない方が良い』

怒りが冷めたと思ったか？

↑『まあそう怒るな。それよりも小説の件についてだが』

長きにわたるメールを経てやっと小説の話題か。

↓『宝条はどんなジャンルで考えているんだ？』

ファンタジーか？ はたまたホラー？ 俺は非常に気になった。

↑『私としてはコメディで行こうと思っている。日常のな』

予想外過ぎる……。宝条のキャラとのギャップのせいで脳みそがオーバーヒートしてくる位予想外でした。

↓『宝条が書くのか？』

ゴーストライター居たりして。

↑『勿論』

畜生。じゃあ俺は元から無かった選択肢が一つ狭まって選択肢が減ってしまったかったよかったと言うことか。

↓『まさか宝条がコメディを書くとは思いませんDEATHTA』

↑『村山も登場させるつもりだぞ』

させんなよ恥ずかしい。そうと聞けば立ち位置が気になる。

↓『どんな立ち位置で出すんだ？』

↑『女子が主観の小説だからおそらく恋愛相手か大魔王だろう』

↓『なんでラブコメの選択肢に大魔王が居るんだよ』

↑『気にするな。ところでだが、村山は私を登場させるつもりか？』
突然なんだ……。ここで出すというのは簡単だが俺が書くのは戦記。

しかも戦争映画などにおいて俺は恋愛要素が入るのを酷く拒絶する傾向にあるから絶対に俺が書く小説に若い女子は入らない。あつても故郷にいる妻かフィアンセを死亡フラグ作りのために登場させる位か。

↓『旦那を死なせたかったら出しても良いよ』

お前もそんな事をするのはつらいだろう？なあ宝条。

↑『旦那は居ないのだが……』

いやまあそうだけど。

↓『いや、俺の小説だと戦記だから女子は全部死亡フラグ作るかも
ブツって決まってるのよ』

↑『せめて目立ちたい。お前の妻として出してくれ』

こいつ俺に死ねと言っているのか。

↓『俺はまだ死にたくない』

↑『私がこんなに懇願してるのに出してくれないのか』
なんでこいつこんな出たがるんだよ!!

↓『なんでそんなに出たがっている』

↑『私が出すんだから村山も出すのは当然』

いや、それは宝条が勝手に決めた事じゃないか？

↓『いや、まあ今決められる事じゃないし……』

↑『今決めろ』

厳しいな！

↓『じゃあ出さない』

決めるって言われたらこう答えるしかないでしょう。

↑『駄目だ』

この野郎。

↓『選択肢は”出す”しかないのか』

↑『当然だ』

↓『こだわるなあ』

↑『出すと言わないと今からお前の母親に挨拶しに行くぞ』

俺はすぐに窓から玄関の先を見る。そこには黒い長い車が……冗談
だろおいおいおい。

第十話 2 宝条にメールしたばかりに

↓ 『お前なにうちに来とんねんのドアホ』

↑ 『さあ言え』

車から宝条らしき人影が降りてきたし。うわこっちみんな。

↓ 『駄目だと言ったら』

↑ 『挨拶しに行く』

↓ 『駄目』

宝条が玄関に向かって歩き出しやがった。おい待て冗談ですよ！

↓ 『冗談冗談』

だめだ！ 全く携帯を見ていない！

「冗談ですから！ ホント止めてくださいうちの親はそういうのしつこいんですって！ 堪忍してつかあさい！」

俺は精一杯大声で叫ぶ。宝条は二階の俺を向く。

「じゃあ出してくれる！？」

なんでだよ……なんであなたはそこまでこだわるのですか。

「……」

俺は何も言えなかった。だからスタスタ行っちゃうのかあなたは。

「待って！ じゃあ男として出すのはどう？」

これなら良いだろ。

「駄目だ」

ぬおおおおおお！ 八方ふさがりではないか！

「じゃあ宝条出さなければいいじゃん！ 俺なんか出さずに書けばいいじゃないか！」

それが一番楽なんじゃないか。

「だって出さないとつまらないんですもの」

俺はお前の何だ？

「……とにかく、分かった。お前はそんなに俺を出したくて、そして俺にお前を出して欲しいんだな？」

宝条はこくりとうなずく。ここは大人な私が折れてやるしか無からう。怖いほどの執念だ、理由が分からないからさらに怖い。

「分かったならお引き取り願いたい。回れ右」

俺はさっさと宝条を帰らせるべく指示をする。宝条はきびすを返し歩き出した。しかし、門を過ぎたところで一度立ち止まり、此方を振り返る。

「どうした？」

「一つ言い忘れた。村山は私の下僕役で出すのだった」

俺は二階から飛び降り、奇襲しようとしたが怖くなって止めた。おれはすぐに自分の机に戻る。

宝条は去った。誰だ宝条を産んだのは、親の顔が見てみたいわ全
く！

「西曉寺先輩は……いいやっぱり」

さて、小説と言うものは主軸が必要だ。さっきまで考えていた戦記物は宝条のせいで設定を大幅に変更する必要が出てきた。だが！切り替えの早い俺のことだ。多分良いアイデアが浮かぶはず。

丁度その時、下で玄関の開いて閉まる音がした。妹が帰ってきたらしい。そしてそのまま急ぎ足で二階に上がってくる音がする。おかしいな、いつもならリビングである程度の時間を過ごすはずだ……。

「バカアニキ！！」

部屋のドアに警戒していた俺はしっかりと身構えていたがでもやっぱり本当に来るとは思っていなかったからびつくりした。

「突然なんだ？ 入るときはノックをして失礼しますだろバカチンが」

「そんなことじゃねえよ！ それよりもあんた彼女できたの！？」いきなりなんだこの妹は。俺の彼女はアサルトライフルだってこの前語って聞かせた記憶はないが彼女がいると言った記憶もない。

「誰に聞いたか答えなさい。折檻してくるから」

「何かりビングにすごく綺麗な人がいてさ！ 母さんと楽しそうに

話してた！」

「髪型は」

「長かった。すごく綺麗に縛ってあった」
宝条だ。

「いいか、そいつの言ってることは十中八九嘘だ」

俺はそう言つてさありビングへ。しかし宝条ってこんないたずらキヤラだったとは知らなかったよ。ぶっ殺してやりたくなるぜ。

リビングの扉の前。宝条がドアの先にいて母と話していると言う。どういった内容だろうか。

「初対面で告白された！？　うちの息子にそんな度胸があるなんて」
宝条、お前一体何を言った？

「ええ、私もその時は驚きましたよ。そのまま押し切られて無理矢理OKと言わされ。そして……そのあとの密会の内容ですがここから先はR-18です」

身に覚えがないって言うか想像すらしてないって言うか……。とにかく突入だ！　これ以上変な偏見を植え付けられるとまずい！　家族の中での立ち位置が！　ガチャッバン！

「宝条！　貴様なにを言う！」

俺はまず大声で宝条にかみつく。

「犯罪者が来たわ」

母がそんな事を言ってきた。宝条も冷たい目線で此方を見ている。ふざけるな、と言いたいですね。

「私は……ああ」

宝条がさも悲しそうな顔で頭を抱えてうなる。

「母さん！　この女の言ってることは全て嘘だ！　信じちゃいけない！」

俺は声高々に主張。しかし宝条、お前はまだ知り合つて一日目だつてのに飛ばしすぎだ。

「女の子の言うことは正しいのよ。あなたが悪いの」

どういう理論だか知らないがとにかく息子の俺の方が宝条より信用

度が低いと言うことだけは分かった。駄目じゃんそれ。

「とにかく宝条の言っていることはまるつきり嘘だすよ!」

「村山は覚えていないのか…… あんな仕打ち……」

おい、しつこいぞ貴様。

「とにかく! 宝条は帰れ! お前がいると駄目だ!」

俺は宝条を無理矢理引つ張って立ち上がり、玄関まで後ろから押し出す。

「こんな美人が来ているのにそんな扱いはないだろう」

「変人の間違いだ。さあ帰った帰った」

「そうか、帰るよ」

宝条は一瞬いままで見せたことのない暗く、寂しい顔を見せた。だがその程度でぶれてたまるか。

俺が無言で立っていると宝条はゆっくりとドアを開けて出て行くとする。しかし、その過程に何度も静止するので聞いてみた。

「なんでそんなにちよくちよく静止するんだお前は!」

「いや、ここは呼び止める所だろう? できるだけチャンスを与えようと思ってな」

やっぱ演技じゃねえか。

「いらんわそんなチャンス」

「そうか……」

また宝条が暗い顔になる。いいからお前は早くいけよ。

そうして、ドアは閉められた。もやもやしたものは残らず、さすがにいい気持ちで一杯でした。

「長い件だった……」

粘りすぎだぞあの女。いやそれどころじゃなくて早く母の誤解を解かないといけないか。俺はそう考えながらリビングへ向かった。

第十一話 運悪く

放課後の文芸部室にて我々三人は地味に集まっていた。情報交換と雑談のためである。

——とはいってもさつきから話すことが無くなった我々は小説の執筆を始めて黙りこくってしまったのだが。

「村山君」

「なんですか」

すこしの沈黙が流れる中で突如西暁寺先輩が話しかけてきた。

「男ってトイレで尿を排泄するときはどのようにするのかしら？」

宝条のキーボードを打つ手が止まる。俺の口も開いたまま止まる。

いやまてよ？ 小説の中身でそう言うシーンがあると言うことか？

「……ハッ！ 俺としたことが。——小説の中身にでも出てくるんですか？」

「出て来ないわよ？ それが？」

「じゃあ聞かないでください。かつてに妄想してください」

んなこといちいち答えてられるか痴女が。すると今度は宝条が口を開く。

「そうと言わずほら、な」

おい、なんでそうなるんだ。

「そうよ、宝条さんの言うとおり」

昔は男尊女卑の時代が続いたらしい。しかし今の惨状を見れば昔の人は発狂するだろう。見る、男性に排泄方法を強制的に聞き出そうとする女性だぞ。

「言うとおりとかいいう話でもなく多数決の話でもない。お前ら両方間違ってます」

俺はキーボードを打ちながら答える。

「そんな事言う奴はこうだ！」

西暁寺先輩が無理矢理にノートパソコンを俺から奪い取った。

「壊れちゃいますよ！」

「こんなので壊れたら訴訟よ訴訟」

「ユーザーが一方的に悪いだけで訴訟されるのは企業からしたらたまったもんじゃないぞ、ここ日本だし。」

「じゃなくて訴訟は置いて先輩。とにかく排泄如きの問題で小説作成の進行を遅らせないでください」

「いやよ」

「なんで！ 引き下がれよ！ 食い下がるなよ。」

「グダグダは勘弁してください」

「じゃあ教えなさいよ！」

「追い詰めていく予定で迫ろうとしていたのだが宝条も先輩に加勢してきて、そのままじりじりと宝条と西曉寺先輩に部室の隅まで押し返される俺。なんで？」

「さて、村山。私は今くすぶる知的好奇心を押さえつけることができない。なぜだか分かるか？ 村山」

「宝条はさながら監督のような面持ちで聞いてくる。」

「分かるかよ」

「残念だ」

「ええ、残念ね」

「何故か二人はそう呟き、さっきよりもさらに追い詰めてきた。なんでこんな下らないことで俺は……。仕方ない、真の村山と言うものを堪能させてやろうではないか。」

「しかし、中国四千年の歴史はその程度で破れるものではないのですよ」

「そう言うて俺は素早く身をかがめ、宝条と西曉寺先輩の間にタツクル。俺の体格ならばここは突破できるはず……！」

「そう？ 私が学んできた武術は一億年ものよ」

「なあにいい！？ どの流派だ！？」

「あなたはここで私に敗れるの。それは必然」

「俺のタツクルも虚しく俺の上半身は西曉寺先輩の脇にすっぽりと押

さえ込まれる。そして……なんと先輩は俺の体を床に対して垂直になるまで持ち上げてきた。無論頭は下。

「ぬう！？」

俺はじたばたもがくが……激痛がしたので止めた。どうやらこれには宝条も協力しているらしい。さつきから股間がぬおおお！？しかし、性的興奮はともかく、抑え込みには最強の手段だと言うことをどこで学んだのだろうか。

「痛いから宝条股間は掴まないで！ それ以前にお前女たるこんな易々と股間を掴めるお前の神経が心配だぐおおあああああ！！」

未来の俺の子供……こ……ど。

「遺言は？」

それにしても、俺は一体何でもここまでのことをされているのか全く今でも理解できない。

「まずは下ろして下さい！！」

「分かったわ」

西曉寺先輩はそのまま俺を放す！ そこで放すな！ 落ちるから痛いから頭から落ちたら死ぬからうわあ！

鈍い音が頭蓋骨に響く。シャレにならねえぞこれ。

「……」

「動かなくなったようだ」

「どうする？」

「東京湾の穴子の餌にでも」

聞き捨てならん！

「俺は一応物語の中核だから死ななかつたから良いものをあなた方は何殺人未遂を犯しているのですか！」

起き上がった瞬間に怒鳴る。これは怒っているのではない。修正だ。

「いや、だつてえ……」

先輩がなんか髪の毛をいじりながらもじもじする。可愛いんだが……可愛いんだが今の俺には火に油。

「だつてえ……じゃないですよ！ とにかく！ ノートパソコン返

してさつきと同じように話を進めましょう!」

「じゃあさ、男子の尿の排泄について……」

「粘る所違いますから。とっとこの話題は止めましょう」

「いや、私は粘る所だと思う」

宝条が何故かそんな事を言う。

「いやどこだよ」

「やはり同じ部活動に所属する仲間。隠し事は良くないと思わないか?」

「異性の隠し事は別だろうが!」

「ちがう」

埒が開かんぞこいつら!

「じゃあお前らどうやって小便してるのか教えてみるよ!」

……やばい、勢いに任せて変な事を口走った。口走ってしまった。

おや?先輩の手に握られているのは……ボイスレコーダー貴様!

「あら、女性に対してなんて言うことを聞くんでしょうかこの殿方は。オッホッホッホ!」

西曉寺先輩が口を袖で隠しながら笑う。これを高笑いというのか。

「先輩。何ですかそれ」

「ボイスレコーダー以外の何物でもないわよ?」

「少し貸してください」

「いやですわ」

最初の会話から今までを省みて俺には何か問題があったか? 泣くぞ?

「泣きますよ?」

俺がそう言う先輩は携帯電話を取りだして俺を撮影しようとする。

「……泣かないのかしら?」

少しは畏敬の念はあったんだよこの人には。昔はな。——あとそろそろ堪忍袋の緒が切れそうだ。

「ファッキン西曉寺。貴様には一つ、教えなければならぬことがある」

「村山君の雰囲気が……変わった？」

西暁寺が少しこわばった顔で此方を見ている。

「俺を怒らせると大変だと言うことだぁ！」

俺は西暁寺の手からボイスレコーダーを掴み、一気にひねり取る。

そして奥の机に置かれているノートパソコンを取り、ドアに向かうと宝条が邪魔をした。

「残念だが君の命運はここで尽きるよ」

宝条がそう言いながらテコンドーの構えを取る。……そうかならば。

「でえい！」

ボイスレコーダーを力任せに宝条の顔の真横に投げつける。宝条は予想通り一瞬ひるむ。甘いぜよ！

「うっ！」

「チャアンス！」

俺は宝条をタックルで突き飛ばす。

「キャッ！」

——宝条も悲鳴を上げるんだな。まあ、怪我しない程度に弱めたから問題ないはず。

「済まん。しかし悪いのはお前だ」

俺はそう言いながらドアを開けて一目散に逃げた。最近疲れることが多すぎて困る。

第十二話 お昼休み

「なあ武藤、ラブコメについて何か意見はあるか？」

「拙者の好む種類は時代物などでそのような種類はあまり読んだことは無い」

「なるほど、確かにお前はそんな感じの臭いがするな」

まあ、良いかこんな事は。—— 閑話休題。

「しかし、剣道部に入ってどんな感じだ？ なにか変わったことはあるか？」

「そついうと難しいが……とりあえず拙者は通常稽古では物足りないから特別稽古を組んでもらっておるよ。如月先輩も通ったことがある道だからの、気合いが入る」

なるほど、やはり俺の考え通りこの男は非常に優秀な素材らしい。

この学校の剣道部も大きな獲得をしたと考えても良いだろう。

「ほう」

適当に相づちを打っておく。

「なかなかきついが、強くなれると思えば拙者は苦には思わんて」

「純粹だ。そついう姿勢は素晴らしいな」

俺には無理だ、一直線に向かう目標が存在しないから。

「お主もそついった目標は無いのか？」

「拙者にはそれほど大きな目標は無き故、今日明日を生きるので精一杯でござる」

と、似たような口調で返してみる。

「それもまた目標、自信を持つと人生が変わるのだ」

明日今日を生きることまた目標、とな？

「自信がないわけじゃないんだけどな。確固たる目標というのが持ち辛いだけのことよ。ほら、俺飽きやすいし」

余にとって趣味ははまっても一ヶ月持つか持たないかというほどだ。特筆すれば、作業が複雑もしくは単調な趣味ほど飽きやすい。

「だから文芸部を選んだ？」

「いや、そう言うわけでもない。ただ何となく。しかし楽しませてもらっているよ。小説を書くことは新鮮なことが多くてそれはそれで楽しい」

作業ってわけでもないしな。学校の感想文とも違うし。

「良いと思う。お主はその趣味を大切にするといい」

「ありがたきお言葉に存じます」

武藤武史は同い年だがおそらく人生的な観点から見ると先輩だ。いわば人生の先輩か。

「お前らの会話はいつも珍妙だな」

横からかすかな香水の香りと長い髪が現れる。俺も武藤もそちらを一瞥すると、再び弁当を食べ始めた。

「無言の拒否とはなかなかきついことをするなあ」

宝条はそう言う俺の机の上にピンクのシルクで包まれた弁当箱をぞんざいに置く。クラスの目が集まる。お前らは黙って昼飯に集中しろよ。

「ちよつとちよつと宝条さん。何がしたいんですか」

俺が質問すると宝条は無言で自分の席に引き返し、今度は椅子を持つてきた。そうか、弁当と一緒に食べたいと。

「昼食をお供させてもらう。いやしかし、村山の弁当はバランスが傾いていて良くないなあ。武藤は素晴らしい弁当だ。さすが武藤家の食事」

俺の弁当はそんなに駄目か、しかし武藤家ってなんだ。もしや武藤も宝条と同類の富豪だったりすると言うことか？

「武藤家って何だ？」

「うむ、拙者の家は武藤流という流派の武闘家で、あらゆる種目についての道場を開いている。経営に関しては父上が妙に優秀で、関東から近畿まで展開している」

なんだかんだいって自慢げに話す武藤君。

「うお、それはかなり……」

「なに、いままでと変わらず接してくればありがたい。拙者もその方が良い」

「こいつは私に一言目で敬語をやめた男だ。そんな事言わずとも勝手にそうなる」

「宝条はすこしお黙り」

この女のお口から出る言葉は文句と皮肉しかないのかね。

「ははは、なかなか気骨のありそうな御仁だからな。一目見て分かっていたよ」

武藤も同調している。俺に気骨あるのか。

「私もそう思うよ。こいつは一目見たときから他の奴とは違う気がしたから」

宝条がそんな事を言う。お前の方が他の奴とは違うだろ。

「して、その理由は？」

気になったので聞いてみる。

「まずはだ。村山は女に対しての引きがない」

「そりやまあ、妹で慣れたからな」

しかもあの性格だし俺あんなのとかまっていた所為で女子に対する当たりが強くなっちゃったからな。

「そう慣れるものじゃないだろう」

そうかなあ。俺的にはそんな感じなんだけどな。

「そう思う？」

武藤に聞いてみる。

「そう思う」

武藤は頷きながらそう言った。

「武藤は女が苦手なのか？」

聞いてみた。

「拙者は一応姉が居るが、それと他の女子とは感じ方が違うのだ。本能的に身内と知っている為だとは思う」
なるほどな。

「いや、まあ別に取り繕う必要はないじゃん」

俺は正直なことを言った。宝条はうーむと首をかしげる。

「私の目の前だと大体の男子が身なりを整え始めたり筋トレを始めたりする男子もよくいる。村山は浮世離れしているのかも知れない」その言いぐさは何だ。俺は枯れた人間か？ 仙人か？ 愛深き故に愛を捨てた戦士か？

「……なんかしゃくに障るが俺は少なくともお前よりは俗物だと思っぞ」

「私は相手が私と話するとき緊張しているかしていないか、取り繕っていないかで俗物かそうじゃないか判断しているんだ」

宝条、お前はどこの審判だ。

「少なくともお前と初めて話したときは緊張したよ」

「私だって初対面のお前と話したときは緊張したよ」

「嘘をつくんじゃない」

「いいや、嘘じゃない」

「ほお、緊張しているならまずは敬語からだろ」

「顔を赤くしていたのを覚えていないのか？」

ああ確かに。あれが緊張だったのか。俺は見とれていたが。

「初対面の時は超人だと思ってたけどな。殻は良いんだけど中身はもう終わって——いて！」

宝条がつま先でけつてきた。しかもすねをな！

「人のことを終わってるなどと言わないでもらいたいものだな」

怒ってるのか？ 顔は微笑を浮かべたままだが怒っているのか！？

「いやでもいや何でもありませんからホント股間を足で圧縮するのを止めてうぐう」

「どうだどうだどうだ？ 気持ちいいか！？」

がたあ！ と素早く立ち上がる俺。息子の方がじゃなくなてな。

「子供でなくなったらどうするんだ！ 自分のやったことを考える！ ええ！？」

ここは一つ説教しなくてはなるまい。他人の生殖器を脅かすことの重大さを。

「それは確かに困るなあ」

そうだろ？

「でも私の生殖器は圧縮してもそこまで問題はないから村山も問題ない」

でもなんでそうなるんだよ。武藤置いてけぼりだし。

「なんでこうなるかなあ。……」

俺は黙って座る。そして宝条とは金輪際目を合わせない。俺はあんな目をしたクラスメイト達を見たことがない。

「どうした、村山」

宝条がいきなり変わった雰囲気になすがにさっきまでのヘラヘラした笑いが消えた。

「だって空気がさあ」

俺はそう言いながらウインナーをつつく。ウインナー二本さえあればご飯が一杯食べられるのだよ。

「……たしかにな」

宝条も察したのか無言でお弁当をつつき始めた。やり過ぎは良くないと思います。

第十三話 宝条（前書き）

北条椿姫目線のお話。

第十三話 宝条

私は宝条椿姫。別名宝条だ。いや、それは別名じゃなかった。

ともかく、私はいつものように村山をいじり倒したりして帰ってきたわけだが、先ず家に帰る方法がリムジンなのだ。

家も中途半端に遠いが、私は正直一人暮らしをしたいと親に行つたのだが断固として受け入れてくれなかった。まあ一般の学校に通わせてくれただけよしとしよう。

村山と西曉寺とお別れし、校門前のリムジンに乗る。私の家のだけじゃなくて他のリムジンも止まっている。ロールスロイスとかもある。

なんだかんだ行つてこの学校はお嬢様お坊ちゃまの率が高いのだ。リムジンが発進すると執事長であるエドワード・マコウィッツが前を向いたまま口を開いた。

「お嬢様、今日は学校で何かありましたか？」

ふむ、何かあるかというと村山をいじつたり西曉寺のライバル視を軽くないなしたりしたことぐらいで何もないな。

「何も」

「左様でございますか」

会話はそれだけだ。しかし私は母や父よりもこのエドワードに多く子育てされ、思い出もこのエドワードとの思い出の方が多い。だから、私の家で最も話すのはこの執事長で、親や他の執事とはほとんど口をきかない。きくとしたら雑用を頼むことぐらい。

「しっかし村山も初対面から少ししか経ってないにも関わらず段々と私の対応になれてきたな……」

あの男は他の男とは違う何かがある。それが何かが分からないからこまる。少なくとも普通の女子よりは見合い回数も多いし、そこで得た知識や経験からある程度の男心は推測できる。村山は普通の男とほとんど同じような心を持っているが……精神が老いてるのか、

女に対する関心が薄い。だからこそいじり甲斐があるのだが。私がムキになって家に出向いたがああ男はあろう事か私のはかなげな顔を見てから全く臆せずに玄関から突き出した。あれにはさすがにびつくりした。

「お嬢様、それは男性でございますか」

執事が妙に軽い口調で聞いてきた。

「男性だが、勘違いも甚だしいぞエドワード。あれは私の玩具だ」

そう、君は私の玩具なのだよ、村山君。

「ホッホッホ」

エドワードはそう笑いながら右折にハンドルを切る。家はもうすぐだ。

もうすぐと言ってももう着いてしまったようだ。ドアを若い男の執事が開ける。世の中では美男子に該当するらしい男だが、残念ながら私の心はその程度ではぶれない。大体こいつの名前を私は覚えていない。

「エドワード、今日はさっさと風呂に入りたい。食事も早めにだ」

「かしこまりました」

さて、村山がどう私の小説で動くかが楽しみでしたかがない。私はプロットを書かないのだが村山の人格や立ち位置はもう脳内で完成しているのだ。村山は勇者、私は女神で勇者を好き勝手に使役する役。西曉寺は大魔王決定。

「ムフツ」

私は美男子揃いの執事が道の両脇で私に向かって「お帰りなさいませ！ お嬢様」とお辞儀をしている間を抑えきれない笑みを浮かべつつ通るのだった。

風呂も飯も食べた。あとは小説だ！

「さって、村山にいつちよメールでもしてみるか」

その前に何となくあいつをからかってやりたくなった。

↓「親愛なる村山へ。あなたはめでたく勇者になりました」

さて、返信されるまでもう執筆を開始するか。

——三十分後。

↑「いやあ実におめでたい。でもお前はどうせ女神とかの勇者を使役する立場なんだろう？ 確実に」

さすが村山、私のことをよく分かってるじゃないか。

私の顔に自然と笑みがこぼれる。最近はよく心から笑えることが多くて良い。

↓「よく分かっているね。そう、これから君は私にこき使われて魔王サイギョージを倒す旅に出るのだよ」

数分で返ってきた。

↑「最悪じゃねえか。あと先輩の扱いも結構酷くないか。美味しい所とかの話じゃなくて」

↓「しょうがないじゃないか。小説の話題を切り出したときからの構成は決まっていたのだから」

↑「俺はお前が出ることもなんか決まっていなかったぞアホ」
カチンと来た。おなごに対してアホ？

↓「成績優良者になる予定である私に対してアホとはいいだろう、定期テストで私と勝負するかね？」

↑「やだ」

二文字返信は結構寂しいものだよ、村山。

↓「……無性に村山と勝負したくなってきた」

負けた方は勝った方の言うことを何でも聞く、と言うルール付きでな。

↑「俺は無性に勝負を逃げたくなってきたよ」

↓「お前は男だろ」

↑「お前は女以外の何かだろ」

ほほう、私が？ この美貌を持つ私のことを女以外と？

↓「じゃあ女以外の何か、言ってみなさい」

↑「うんこ」

なんで十五秒でその答えになるかなあ。

↓「それはこまる。それだと村山はウンコが隣に座ったりしても全

く気にしないような男になってしまっぞ」

↑「訂正、あなたはかわいげのない女の子」

女の子には昇格したがかわいげの無いとはなんとかかわいげの無い答え。

↓「美人だろう？」

だろ？

↑「自分で言う奴に限って終わってるのが何故分からん！」

↓「終わっているとは失敬な。またあの時みたいに股間を圧縮するぞ」

↑「俺は反撃できねえじゃねえか」

おや、女心を全く理解しようとも女性に関心を持とうともしないくせに体に対する攻撃はためらうと。

↓「君は全く女に対して遠慮がなさそうだが」

↑「俺のせいで子供が産めなくなつて、そしてそのせいで恨まれたら困るじゃねえか」

↓「じゃあその女性と結婚すれば良いんじゃないか」

↑「やだよ、俺は結婚なんて破棄しづらい契約を結ぶつもりはない結婚が契約……確かにそういった見方もある。」

↓「Ifの話だが……村山は私が結婚したらどう思う？」

私がそう送ると返信が滞る。確かに私も私らしくない質問をしたと思う。村山はやはり私のことをなんだかんだ言つて心配してたりするのだろうか。そんな淡い期待は次の返信で打ち砕かれたが。

↑「先ず一言。おめでとうと言いたい。」

おめでとうと言つてそのあとは縁を切りたいね。

あと結婚式には呼ばないでくれよ？

お前が結婚するような相手にふさわしいようなご祝儀なんて持ち合わせている余裕はないからな。

別に百円でいいのなら俺は喜んで結婚式に行くがな、飯うまそっだし。

長文失礼、行き遅れに注意しなさい」

携帯がミシツと、つい力が入ってしまふ。ならば、

↓「私が村山と結婚したい、といったら？」

↑「遺産相続権と会社の名義をそっくりそのままくれるなら俺は三つ返事で快諾するよ。さあ結婚しよう」

なかなか辛口な事を言ってくれる。

↓「残念だが君は私と結婚しても種馬にしかなり得ない」

↑「それはそれで良い生活だ。働かざる者食うべからずとは面白いことを言ったものだ」

村山はよく分からないが調子に乗ってることは確かだな。

↓「まあ、今の君じゃ私と結婚するにはふさわしくないがね」

↑「ありがたき幸せ」

毎度返しに皮肉が入ってくる。

↓「だから明日は村山の秘密を学校でばらそうと思う」

私を弄んだ罰だ。

↑「……なんの秘密だ」

↓「明日のお楽しみ」

↑「さつきはすいませんでした」

参った。この男にはプライドがないみたいだ。

↓「もう許せないね」

↑「今土下座してます」

↓「写メ」

私がそう言うとうとうやら村山が土下座しているらしい写真が添付されてきた。すごいあっさりなんだが。

↓「駄目だ」

↑「なんでだよ!!」

↓「頭は床を貫通するのが欧米のマナーだ」

↑「ここはジャポンだ!」

↓「では秘密を暴露させてもらおうか」

↑「できません! ホントすいませんでした! 許しておくんなまし!」

変な方言混じってるぞ。

↓「……ではもう一度聞く、私がお前に結婚を申し込んだらどうする？」

↑「はい！ そりゃもう！ 快諾でさあ！」

↓「だめだな」

こいつは薄っぺらい男だな。いや、道化を演じているのか？

↑「ところで、秘密って何だ？」

もう一度聞いてきた。私も知らん。

↓「それは秘密」

↑「北条^{きたじょう}って知ってる？」

突然なんだ？

↓「あの北条家か。あそこの令嬢はパーティで見たことがあるが……」

↑「話したことはないのか」

↓「無いぞ。それがどうした」

↑「じゃあお前俺の秘密なんて握ってないな」

何故そこでそう言う推理にたどり着く。いや、それよりも北条家の令嬢とこいつはまさか何かあったのか？

↓「ところで北条家となにか確執でもあるのか」

↑「黙秘権を行使させてもらう。あの件は俺の人生の汚点だからな
余計知りたくなってきたなあ。今度パーティーに出たときに探してみよう。いつもはつまらないが、目的があるところも出席したくなるとは。」

↓「まあいい。本人に直接聞いてみるよ」

↑「止めとけ、爆発するから」

↓「余計聞きたくなってきた」

↑「命の保障はできないが、ホントに聞くのか？」

村山にしては随分と粘り強く聞いてくるな。

↓「ああ、私だって宝条家の一人娘だぞ」

↑「しーらね」

↓「まあ、明日をお楽しみに。あと、お前の秘密ってのは嘘じゃな

い」

私はそこでメールを切った。何通かメールが来てたが無視した。ところで秘密の話だが、村山の母と話すうちに幼少の恥ずかしい話がある程度聞き出せたのでそれを秘密としてみよう。

第十四話 休日（前書き）

新しい女の子が登場します。おめでとう村山。

第十四話 休日

今日はゴルフ日和だ。と言うことで久しぶりのオフに俺はたった一人で比較的都市部のどこかに来ていた。誘うと言っても武藤は絶対剣道部の練習で無理だし、宝条と西曉寺は金持ちだから何かありそうだし、身内もなんかめんどくさいし、じゃあどうする？ 一人だよ！ といった具合で来たのだ。

目的と言えばゲームを買いに来たのと、ゲームをやりに来たのと、暇つぶしだろう。発想が貧困ですいません。

「しかし、カップルとか多いな」

つい口からそんな言葉が出る。休日は大体こんなもんだがな。忌々しい。

そして軽く歩くと、早速そこでなにか罵声のようなものが聞こえた。悪い予感しかしないが、あの通りか？

単なる好奇心から俺は右手にある通りに入る。すると金髪の男二人が壁に追い詰めた誰かを囲むように立っている。もしか女か？ 気になるし素通りしつつ他の通行人と同じようにチラ見でいいか。

俺は普通の通行人のように歩き出す。そして軽く横をチラツと見る。

「……？」

我々の学校の制服を着ているようだ、結構な美人だしナンパ被害にあつても自業自得だな。ほら、不細工な人も不細工で被害被つてるし美人だけ得するのも酷いもんじゃん。世の中はバランスで成り立ってるからこのくらいのイベントは必要だと思うのよ。しかしあの女の子は一人で歩いてたのか？ いや、友人が居るはずだろ、もしくは彼氏が。そいつに助けてもらうべきだな。

いろいろ考えて顔を上げると女の子が此方を見ている。そういえば俺の足さつきから止まってないか？ やべえ！ 女の子が口を開いた！

「みてるなら助けてくださいよ！」

ほらこつちに被害が被る。美人はいつもこうだ！　なんで俺がこんな責任を負う必要があるんだ！

「んだおめえは！」

金髪の兄ちゃんが俺に気付いてメンチ切ってきた。

「ちよつと待ってください。お嬢さん、私は一生人を殴れない病気でしてね、力になれそうもありません。

あともう一つ、普段から顔が良いからって良い生活を享受して！
時にはこういうイベントも必要だと思います！

美人だから助けてくれると思ったら大間違いなのだよ！　うわはははははははは！」

日頃の鬱憤も込めて言い放ってやった、笑っていたからその時俺は目を閉じていたらしい。いきなり顔を殴られたようで激痛が走る…

…涙が出ちゃうよ！

「痛い痛い痛い痛い！」

俺は顔を押さえながらうずくまる。鼻頭殴られると無条件に涙出るよね。それ以前に誰に殴られた？

俺は状況も分からないまま顔を上げるとそこには意味の分からない光景が広がっていた。

男が二人倒れ伏して、女の子はそれをゴミを見るかのような目で見つめている。俺もその目で見られている。通行人は目を丸くして立ち止まっている。つまり、女の子は殴られた俺を助けてくれたのか？　いやどうなってるんだ？

「いってえ……ところで俺誰に殴られたの？」

聞いてみた。

「むかついたから殴ったのよ」

「俺をあんたが？」

「ええ」

そうですか……そうですか！

「にしてもあんた強いね」

痛いのは我慢。

「一応あたし合気道やってるからね」

なるほど、たしかに男達の体に傷跡らしきものは見当たらない。でもなんで僕は殴ったんですか？

「そうですね、しかし不可解なのは何故俺を殴ったんだ」

「むかついたからよ。言動に」

いやだって、圧倒的優勢だったことを信じて疑わなかったからそんな事を言っただけで……。

「一種の気の迷いでした。私はこれからしっかり生きていきたいと思います。ではこれにて」

俺はさっさとここを離れてしまいたかった。薬局で軟膏買って顔に塗りたいからな。

「待ちなさいよ」

後ろから声がかかる。どうせかかるとは思っていましたよ。俺は何ですか？　と言って振り向く。

「これも何かの縁だわ」

「いやそれは違うと思います」

そう言っただけはさっさと歩き出したかったのに。

世界が反転する。さっきまで下だった石畳は上に、右に、下に、体は横たわり、激痛が走り、さっきの兄ちゃん達もこんな痛かったんだな、と思った。

「投げただろお前！」

俺は地面に横たわり、袈裟固めで押さえ込まれながら罵声を浴びせる。周囲の人間は奇怪な見世物を見るように此方を見る。

「そうよ、あなたがあまりにも言うことを聞かないから投げたのよ」

「そうか、お前の言いたいことはよく分かったから、早くこれを解いてくれ」

「いやよ、あなたが私の質問に答えなければこれを解くことはできない」

質問って？

「わあつた。答えられる範囲なら答えよう」

「あなたはどこの生徒？」

それは知られたくない。

「答えられない範囲だ、次」

瞬間、俺の顔に大きな質量がのしかかり、女性特有のフェロモンの香りと、石畳に押しつけられた方の土の香りがした。無論、不愉快だ。痛いから。

「答えなさい」

「……蘭高校」

「そう、同じ高校なのね、あとで挨拶させてもらっわ
すんなよアホ。」

「良かったな。じゃあ早く解いてよ」

「駄目よ、まだあるわ」

「さっさと質問してくれ」

「お言葉に甘えさせてただくわ。あなたの名前とクラスを教えなさい」

なんでクラスまで教えなくちゃいけないんだよ。冗談じゃないわよ！

「名前だけでお願いします」

「じゃあ名前だけで」

「村山篤志」

少女の体がぴくつと動く。何かあったか？

「もう全部分かったわ。フフフ……」

「不気味な笑いだな……いてててててて！！ すいませんでしたあ！」

顔を圧迫するの止める。ほんと痛くて抵抗できなくなるから。

少女はすぐに袈裟固めを解いてくれた。顔の横側が未だにすぎずきする。

「私の名前はもう知ってるわよね」

何いってんだこいつ、どつかのアイドル気取ってるのか？

「自信過剰も甚だしい、君のような女性俺は聞いたこともないね！

じゃ！」

俺はそう捨て台詞を吐いてさっさと走って逃げる。俺はこういった輩に絡まれるのはごめんなんだよ。チャラ男兄弟に大人しく捕まっていればこんな事にならずに済んだのに！

一定時間走って後ろを振り返ると意外にも少女は付いてこなかった。俺は安堵してしまった。翌日に降りかかる災厄のことも知らずに。

第十五話 やっちゃった村山

今日の放課後はやはり文芸部での活動であるのだが、そうは言っても今は朝なのでその活動内容に思いをはせて嘆く必要もない。

いつも通りに朝起きると、やはり朝ご飯を食っている妹と母に出会う。無論妹は必ず此方を一回睨んでくるので、こっちは限界の高さから見下げてやった。

しばらく此方を睨んでいたが、俺は無視して妹の隣に座る。何故隣に座るかというと良くあるでしょ？ 家族ごとにある椅子の定位置というやつが。ちゃんと飯もセットされているし。

不本意だが幼き頃から私の定位置は決まっていた。本来私と妹は水と油、犬と猿、上と下の関係なのだ。

「何あんたさつきから険しい顔で額に手を当ててるのよ。何かむかついてくる」

横から変な声が聞こえるが気にしないで行こう。それよりも何となく聞きたい事柄ができたので聞いてみる。というか早く解消して欲しい事柄だが。

「妹、お前彼氏できたか」

俺は気になって話しかける。妹は此方を何か変なものでも見るような目で見ている。俺はその目と向き合いつつ、味噌汁をすすった。

「なんで兄貴がそんな事聞くのよ」

非常に攻撃的な女だ。なんでもつとこう……素直な子に育たなかったのかな。

「気になるから。じゃだめか？」

「じゃあ言うけど。私は今のところ彼氏なんて作る気はないわ」

「あ、そう」

俺はそう言って卵焼きを箸で分割し、一口食べ、そのあとご飯を口に含む。そして、飲み込んだあとに味噌汁を飲み、またその繰り返し

しをする。

「……私からも質問して良い？」

珍しく妹から話があるらしい。俺は牛乳を飲みながら頷いた。

「この前来た人は本当に彼女じゃないの？」

「ああ、あれはなんだ。変質者だから気にするな」

本当に変質者だと思うよ。

「え？ でも兄貴よりしつかりした感じで……」

「え？ ホント？」

妹は無言で頷く。俺が宝条よりしつかりしてないのかよオイイ。

「どうした兄貴！ 顔が蒼く！」

珍しく妹が俺を心配している。さすがにショッキングだからね、あの変質者よりもしっかりしていないとは。

「いいんだ、三奈。お前は生きろ」

俺はそう言っただけで立ち、目の前もよく分からないような状況で部屋に戻っていった。ご飯はしっかりと食い終わったよ。

…リビングでは。

「珍しく仲よさそうだったわねあなた達」

母、柳子は皿を洗いつつ三奈にそう話しかける。三奈はソファに越しに振り返り顔をしかめつつ答える。

「別にそう言うわけじゃないわ」

母は少し笑って答える。

「そう言うことにしておきます」

三奈は少し赤くなる。

「からかわないでよ！」

事実、私こと三奈は兄のことが嫌いなわけではない。むしろ兄妹として好意さえ持っている。何故あのような態度を持つかというと昔から兄は全く遠慮をしないタチなので甘やかすと勝手に部屋に入ってきてくつろいだりするので、私の友達にそういう様子が見られたら誤解どころの騒ぎじゃなくなる為だ。兄はすっかり勘違いしているようだがそれでかまわない。ちなみに彼氏を作らないのは何と

なくだ。

さつてと、忘れ物無し、パイ投げ用のパイよし。俺はスクールバッグを肩にかけ、学校へと歩き出した。

「拙者は知らん。お主が阿呆な事をしてボコボコにされた所でない」朝俺の計画を武藤に伝えたらこんな反応をされた。だが俺はそれでもやらなくてはならぬのだ。パイ投げトラップ計画を。

そして昼休み、この時点では文芸部室にトラップを仕掛けることはできない。放課後に丁度引かかるようにしなくてはならないから、六時間目休み辺りに仕掛けるとしよう。

俺は頭の中でそんな事を考えながら弁当を食っていると廊下が少しざわめいている。ざわめくって結構とんでもない事だよな。

「何かあるのかな？」

「拙者には分からん。しかし、何かが廊下を移動していて、それに対するざわめきと言うことは拙者にも分かる」

「それは俺にも分かる」

宝条は文芸部室へ行ってしまったので今は居ない。結構あいつもあそこを気に入っているのだ。

「うん？」

俺は目を疑った。

そのざわめきの正体は結局俺にとって取るに足らないことだったが、実に鬱陶しい、二度と会いたくない、やはりお前か。

「村山く〜ん」

教室にそう言いながら入ってきたのは昨日、俺を投げたり押さえ込んだりした女だ。俺は額に手を当てる。大体において誰だこの女。

武藤を見ると、俺と奴を見ながら目をぱちくりさせている。一体何をそんなに焦る必要があるのだろうか。

「どうした武藤」

「い、いや。なんでもない。意外にも村山殿は生徒会長と知り合いなのだな」

なんでもなくねえよ。この女が生徒会長ってどういうこと？

「あれ、もしかして生徒会長さん？」

俺は隣でずつとうるさくしている生徒会長らしい女に聞いてみる。

「あら本当に知らなかったのね。いいわ、みんな知っていると思うけどもう一回自己紹介してあげましょう」

「いや、別にもう良いんで。俺達の弁当ブレイクを邪魔しないでください」

俺がそう答えると周囲がざわめいた。え？ 選択肢間違えたのか俺？ 生徒会長はちよつと怒ってる感じで俺を見ている。というのは顔が笑っていて目が笑っていない状態のことを指すのだから。

「じゃなくて自己紹介をお願いします」

俺は二秒後に言い直した。周りとの女を敵に回すのは避けたい。

「変な言葉が直前に聞こえた気がするけどまあ良いわ。私の名前は東南。^{あずさなみ}現役東大合格圏内にいる天才ウーマンよ！」

クラスの周囲からおおおお〜〜という声上がる。俺も惚けた声しか出せなかったが。というか、

「東南^{とうなん}じゃねえかハハハハ……ハアツ！？…アアア」

俺の声が次第にかすれていったのは生徒会長がいきなり俺を力ずくで立たせて金的をしたからだ。今のところ、死亡中。

「私を東南^{とうなん}と呼ぶ奴は例外なくぶちのめすことにしているわ」

「そう……でしたか」

俺は椅子に座って股間と腹部を押さえながら答える。今のところ、蘇生中。

「昨日挨拶しに行くって言ったでしょ？ しつかり歓迎の準備でもしてと思ったのにね」

「そう……でしたか」

「しまいには私の名前を知らないと。この生徒会長の名前を！」
生徒会長に連動して他の男子も俺を睨んでいる。こいつら何かのケールブルでつながっているのか？ どちらにせよ腹部の鈍い痛みは形容しがたいものがある。

「東さんでしたね。分かりました。あなたがとても天才で素晴らしい

い人であることが分かりました。ええ、分かりましたとも。ですから生徒会業務に戻りましょう。みんなが呼んでいますよ」

俺の周りの女はただでさえめんどくさいんだ。というかもっと友人的な男成分が欲しい。女成分はもうこりこりだ。

「私が仕事を作るのだから他の会員に呼ばれる筋合いはなくてよ！なぜなら私は！」

「……美しく！ 清らかで！ 天才な！」……」

男子一同（武藤と少数除く）の声がこだまする。うるせえ。

「蘭高校生徒会長だから！！ オーホッホッホッホ」

そう高笑いしながら生徒会長は教室から出て行った。その歩く背中
はさながら貴婦人のようで、されど俺の目には阿呆にしか見えなかつた。

前置きが長くて申し訳ないが、俺の企みは文芸部室にドアを開けると顔面にパイ投げが当たってくるトラップを仕掛けて宝条に恥を掻かせるのが今回の狙いだ。

仕掛けは簡単。まず回転する支点に棒を装着。ドアの少し上の方の壁に回転式支点付き棒を垂直に設置。そして、滑車を介した糸でその棒の先端を上からつり、その糸をドアの閉まっているところで固定する。開けると糸の支えが無くなり、回転式支点付きの棒は重力によって丁度相手の顔に当たる。その当たる部分にパイを設置するのだ。デハハハハハ！

「ということで完成だ。あとは宝条を待つのみ！ 西曉寺でもかまわん！ もはや奴は先輩じゃない！」

ドアを閉めて満足。俺はづらからうつとした。なぜってドアの目の前に立ってたら俺が被害を受けるから。

「すいません」

その時、ドアの向こうから聞き慣れない女性徒の声が聞こえた。今開けられるとまずい、このままでは無関係の人に被害が及んでしまう。

糸を手で押さえながら俺はドアを僅かに開けた。隙間から覗くと

そこには随分とスモールな女生徒が居た。小動物らしい雰囲気醸し出している。かなり可愛いぞこの娘。

「なんの用でござんすか？」

微妙に部活動入部ラッシュも過ぎ、みんな落ち着いてくる頃だから入部というわけじゃないと思う。

「あの、こちら蘭高校新聞部なのですがいま様々な部活動の方にインタビューを行っているのです」

「お疲れ様でした」

そういつて俺はドアを閉めようとする。

「え！ ええ！？ そ、そんな……」

少し驚いたあと少しすすり声みたいな声が聞こえてくる。泣かせちゃった？

ガチャリ。

「ではインタビューお願いします！」

少し開けた瞬間ドアを無理矢理力ずくで全開放された。こっちは糸持ってて片手ふさがってんのよ？ しかもこいつ相当の手練れのようにだ。さっきのは演技か！！

「俺部長じゃないんで……」

「そうですか……」

俺はそう言いかけて閃いた。ここであればよく言えば新聞部の記事はメチャクチャ俺にとって面白い記事になるのではないかと。

「俺部長でした。ど忘れしてたわ」

俺はわざとらしく笑っているようだ。新聞部の娘の顔もパアッと輝いた。しかしその笑顔はすでに演技にしか見えなくなっちゃった。

「ではお願いします！」

新聞部の子はマイクを俺に向けてきた。

「ゴホンッ。ええ、この文芸部は現在三人しか居ません。しかし、個性的な三人です。」

皆さんもご存じかも知れませんが、宝条椿姫、西暁寺静というそうそうたるメンバーが揃っています。

主に活動としては本を書く、読むなどの単純なお仕事です。しかし、本を書くとしてもしっかりと文学賞を狙ったりと本格的に頑張っています。かつて小さな賞をいくつかもらっていた先輩が居たらしいですね。

ところで皆さんは宝条さん、西暁寺さんのことを素晴らしい、美人な人物だと思っっているでしょう、フツ。

実は親密になればなるほど分かることなのですが、私は彼女らのことを形容するには園児、幼児、そこら辺の言葉で形容すると良いのでしょうか。ほんと彼女らの実態はそれはもう酷いもので、尻ぬぐいが大変です。ええ、私が居なければきっと駄目になって居たでしょう。

阿保と莫迦ですからアハハハハ……ん？」

今気付いたのだからおかしいな、マイクを持っているのがさっきの娘から西暁寺先輩に変わっているぞ？

「どうした村山、続ける」

横から宝条も顔を出してくる。おかあさん、おしっこ漏らして良いですか。

「え……いや、あの、これはほらね……」

「どうした？」

宝条は笑顔ではさみを持って近付いてくる。え？ それはやり過ぎなんじゃないの？ 待って来ないで！

「ちよっと待つ！ ちよっとってアアアア！？」『ぐちゃ』……あ……」

この音は俺が刺された音じゃなくて後ろからパイが俺の背中に衝突した音ね。

俺は衝撃と同時にこれが後ろからのパイの衝突である事を悟った。宝条は、俺がすっかり忘れていた片手に持っていた糸を切ったのだ。制服洗濯しなきゃな。

しかしそれでも西暁寺先輩達の怒りは収まらないらしい。新聞部の娘にもう帰って良いわ、と有無を言わせぬ口調で迫り、帰らせた。

そして、宝条とともに文芸部室に立ち入ってくる。俺はゆっくりと後ずさる。西曉寺先輩と宝条の背後に般若のオーラが見えてきそうだ。

そして、西曉寺先輩は此方を笑顔で見つめつつ、ゆっくりとドアの鍵を閉める。

「じゃあ、始めましょうか」

死の宣告が部屋に響いた。おそらく私は死ぬでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5357y/>

今日の村山

2012年1月11日01時49分発行